THE NIKKAN KENSETSU TIMES

日刊建設タイムズ

www.k-t

2014（平成26）年
1月28日（火曜日）第13235号
千葉版

昭和41年12月14日　第３種郵便物認可　©日刊建設タイムズ社 2014

発行所　日刊建
〒260-0854　千葉市
電　話043-225-5911
日刊（土・日・祝日休刊
購読料　1か月　7,7
6か月　46,2

きょうの紙面

公共　高須箕和田線ＪＲ横断　竹中土木・奥村組ＪＶ　2

公共　我孫子市14年度新規事業　141事業で査定額49億円　2

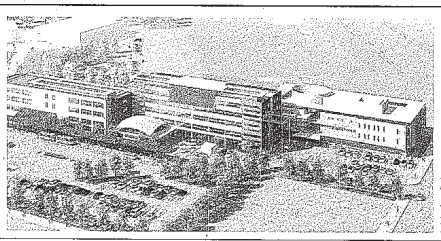
公共　木更津市中郷小欠陥　補強中断、対応検討　2

民間　ＮＡＡが空港用地利用　し3haの太陽光設備　2

公告　九一　業団

概算事業費34億円余

工事（新築棟）、17年度に2期工事（減築改修棟）を行い、18年4月の全庁舎開庁を目指す。



庁舎整備の基本方針は、①市民を守る防災・防犯拠点としての庁舎②すべての利用者にやさしい庁舎③個人情報、行政情報のセキュリティを強化した庁舎④効率的で働きやすい庁舎⑤市民の声が集約される議会機能を確保した庁舎⑥市民協働・市民活動に配慮した庁舎⑦市のシンボルとして市民が親しみをもてる白井市らしい庁舎⑧環境に配慮した庁舎⑨市民の親しみと良好な職場環境が経済的に持続可能（サスティナブル）な庁舎⑩未来を見据え、変化にフレキシブルに対応できる庁舎。

災害対策本部や防災無線室、関連部署を集約配置して防災対策機能を強化するとともに、構造体及び非構造部材の耐震性能を確保。ユニバーサルデザインやワンストップサービスを取り入れるなどして誰もが快適に利用できる庁舎とするほか、市民とのコミュニケーションや協働を推進できる庁舎整備イメージ図（左から減築改修棟、新築棟、保健福祉センター）

永井克弘・日本鳶工業連合会会長に聞く

「とび職の魅力アピールしたい」

（一社）日本鳶工業連合会の永井克弘会長がこのほど、本紙のインタビューに応じ、当面する労働者不足（若年者入職対策）や社会保険未加入問題などについて抱負を語った。

―昨年の11月22日に幕張メッセで行われた「技能五輪のとび部門」について。

日本の23歳以下の職人の中から昨年は15人が選抜されて出場。この大会では「とび」がいかに大事な職種であるか、若い人たちが今後一人前になって仕事をしていくなかで、一つの大きな目標と思って頂きたい。

―大会にとびの部門が参加して今大会で5回目と聞くが。

なくてはならない業種である「とび職」をアピールする良い機会。しかし、最近は業界全体が停滞気味。入職してもすぐに辞めてしまったり、人手不足になりがちのため、倒産・廃業する企業もある。これらは、とびだけでなく建設業界全体の問題であり、私自身、非常に危惧している。そのために私たちは「やれることは、やろう」と。この業界を継続してもらうために、手探りで様々な努力をしている。

―近年、業界内で「労働者不足」が問題になっているが。

若手の入職者が少ないことで、職人の高齢化が進んでいる。今いる職人の多くは、今後10～15年ほどで定年を迎える。建設業は仕事が潤沢にあり、「この仕事を一生やってもいい」と思え、家族も持てて、人並みの生活ができるのであれば、入職者は増えると私は考えている。しかし、社会の動きに比べて我々の業界は、社会保険にしろ遅れがちになっている。

―その「社会保険未加入問題」については。

「保険に加入しましょう」という動きもあるようだが、それもなかなかままならないのが現状である。この業界が遅れているのは確かなことで、このままではいけないと思ってはいるが、悪循環が続いている。それでもこの職種は絶対になくならない。必ず残る職種だが、これでは企業の我慢比べのようになってしまう。本来であれば、同業者が相携えてこの業界を盛り上げていかなくてはならないが、5年、10年後には仲間が減ってしまい、とびの社会的地位も低くなってしまう。

―労働者不足に関連して「後継者問題」をどのように受け止めるか。

跡を継ぐ者に現状の私たちの背中を見せても「この職業に就きたい」となかなか思ってもらえないのではないかと懸念している。屋外の仕事のため、天候に左右される。月給で仕事をしている人はいいが、日給で生活している人は生活が難しくなる。不安定な仕事だと、後継すべき人間も生活に不安を持ってしまう。また最近は、高学歴を好む若者が多い傾向にある。

―この世界に飛び込んできた「若とび」の将来に向けて。

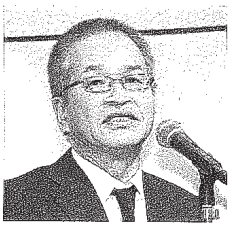
「とびの仕事は怪我がつきものだ」と言われないように大事に育て、保険関係もしっかり整備して生活に不安を与えないような業界を目指したい。暗い話題も多いが、技能五輪のようなイベントで業界を盛り上げ、とび職の魅力をアピールすることが重要だと考えている。

雑草抑制「ウェーブボウソウ」「ちば千産技術」1号に

県コンクリート製品協組が賀詞交歓

千葉県コンクリート製品協同組合（花澤理文理事長）の「2014年新年賀詞交歓会」が23日、千葉市内の京成ホテルミラマーレで開かれ、総勢50人余が出席した。

冒頭、主催者を代表してあいさつした花澤理事長は、昨年の暮れからの資材・原材料の値上がりをはじめ、労働者不足と今後見込まれる人件費の高騰、本年4月からの消費税増税など

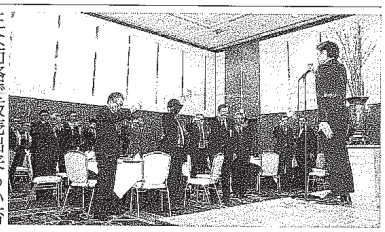


あいさつする花澤理事長（上）と祝辞を述べる土屋・技術情報室長

に言及。同組合の存在理由として「これら深刻な状況にあるという危機感の認識を共有することも大事。この1年間に組合として適正な価格で販売出来る状況を作り出せるか否かが、私の仕事だと思う」と述べたうえで「みなさんとともに総力戦を闘い、危機感を共有して、来年春までには皆々と自分たちの会社の経営が出来るように、一致団結して解決したい」と弁。

また、2つ目として氏は、数年来にわたり普及促進に努めてきた雑草抑制製品・ウェーブボウソウが、千葉県固有の「ちば千産技術」として県県土整備部に登録され、4月1日から県のホームページで公開されることを説明。「いよいよ本格的な普及拡大に向けてスタートする年になる。県の考え方に合致し、経営の一助になるこの機会を存分に活用して頂きたい」と呼びかけた。

最後に花澤理事長は「適正な価格で販売出来るか否かと、ウェーブボウソウの普及拡大が本格的にスタートを切れるかの2点が今年の抱負でもあり、経営者として死活問題でもある。みなさんの一層の協力、支援、理解を賜り、総力を挙げて解決したい」と述べ、あいさつを結んだ。



引き続き、来賓を代表してあいさつした県県土整備部技術管理課の土屋隆二・技術情報室長は、エコセメント利用によるコンクリート製品づくりを進める同組合員に感謝の意を示したうえで、東日本大震災に伴う原発事故で発生した放射能問題により、現在でも市原エコセメント工場が操業停止の状態に追い込まれている状況について、「組合員の安定した事業が展開できるよう、市原エコセメントの1日も早い安全で安心な操業再開が待たれる」と弁。

また、前述の「ちば千産技術」については「県内の建設関連企業の技術力や開発意欲の向上のために、土木分野などの新技術・新工法を広く情報発信し、その活用や普及を促進する取り組みを昨年11月から始め、貴組合のみなさんからも提案を頂いた」と紹介し、祝辞に代えた。

（3面に「ウェーブボウソウ」の概要と開発経緯など）

◇

県県土整備部技術管理課は24日、県内企業が開発した新技術「ちば千産技術」について発表。昨年11月1日から12月20日の間で行った第1回目の公募で11技術の提案があったことを報告するとともに、その内容を技術管理課ホームページ（新技術のページ）に掲載。「番号1」にウェーブボウソウが登録された。